

## 善意と不安と欲



第一生命経済研究所 特別顧問

山口 公生

2011年3月11日の東日本大震災によって、わが国は未曾有の犠牲を出し、莫大な被害を被ったことは記憶に新しい。そのときの被災された人々の労苦は未だに筆舌に尽くしがたいものがあると思われる。

そのとき、われわれが目目の当たりにしたものは忍耐強く、耐え忍ぶ被災地の方たちの姿であった。さらに、国民の多くが、あるいは海外の人々までもが物心両面で善意の支援をし、多くのボランティアが駆けつけたのである。

阪神淡路大震災のときと同じく、とりわけわが国民の自制心と優しさを改めて感じたのは国民共通であったと思う。ここに私は日本人の心情の良き「岩盤」を見た気がした。

外国のメディアもこぞって震災直後の日本人の驚くべき忍耐力、静けさ、規律に対して賛辞を送った。

大震災を乗り越えて善意に満ちた日本社会が出現したようにも思えた。

しかし、すぐにこうした善良な人々がガソリンを求めて長い列を作り、首都圏の店先からは電池、牛乳、米、パン、水などが消えていった。買いだめはやめようというコマーシャルが流されても、その動きはしばらく止まらなかったのも事実である。

これは原発事故が騒ぎを拡大させた面も大きかったと思う。

このときのことを比喩的にいえば日本人の心の「岩盤」の上に欲の塵が積もってきたような印象を受けた。この対比をどう考えるべきかと悩んだ。

しかし、この小さな欲は自分のこととして考えてみても強くは非難できないことだろう。具体的な不安の中で家族を守りたい、友人を助きたい等いろいろな私的な動機が存在したはずである。これは非難すべきものでもあるまい。

人は不安に駆られたときに善意の心、譲り合う心とは違った心理に陥ってしまい、結果として経済がうまく回らない事態が現出することに私たちは気づかされたといってもいい。

物が強奪されたわけではなく、また多くの物品は店先に残っていた。その意味で他人を押しつけてまで自己の利益を追い求めるような強欲ではない。決してほめられたことではないにせよ、やむをえない欲の現われといえよう。

前向きに考えれば、こうした利己的な欲を生じさせず、人本来の善意を育てるには、人々に不安を感じさせない社会を作ることが肝要であろう。

年金、医療、介護、子育て、家庭、就労環境、地域とのかかわり、生きがい、仕事と職場など、不安を生み出す要素はいたるところに存在する。

そうした不安を取り除くことが、これから社会政策に求められる一番重要な視点ではないだろうか。

これまでの高度成長で豊かになった日本社会は、その豊かさが少しでも脅かされそうになると不安を覚えるようになった。不安に敏感になったといえよう。

その意味では豊かな社会においてこそ、不安を封じ込めることの大切さを感じないわけにはいかない。心の問題でもあるので、啓発活動も重要となる。

その意味で、ライフデザイン啓発活動も人々の不安を緩和し、欲の塵が積もるのを防ぎ、善意にあふれた安心できる社会建設に貢献すべく努力していかなければならない。この大震災でこのことを痛感させられた。